

使徒言行録 16 章 11 節～15 節。わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話に注意深く聞いた。そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。

パウロ、シラス、テモテの三人はトルコの西岸トロアスから船に乗ってサモトラケ島に直航し、翌日、ギリシアのネアポリスに着いた。そこから、徒歩でフィリピまで来た。フィリピはマケドニア州第一区の都市で、アレクサンドロス大王の父、フィリポス二世の名にちなんだローマの植民都市であった。この町に数日間滞在し、安息日になったので、町の門を出て、ユダヤ人の祈りの場があると思われる川岸に行った。ユダヤ人が少なく会堂はなかったらしい。ユダヤ人は清めのために水のある所で礼拝をするので、川岸に行ったのである。行ってみると、婦人たちがいたので、パウロたちは座って、主イエスの福音を語った。すると、ティアティラ市出身の紫布を商う、ユダヤ教に改宗したリディアという婦人が聞いていた。主が彼女の心を開かれ、彼女はパウロの話に注意深く聞いていた。ティアティラ市は小アジア、現在のトルコの西部に位置する町で、彼女はフィリピまで来て紫布の商売をしていた。紫布は非常に高価な布で、その布を商うリディアは裕福な職業婦人であった。ユダヤには職業婦人はいなかったので、パウロは新しい婦人像を見たのではないか。リディアはパウロの語る主イエスの福音を信じ、彼女も家族の者も洗礼を受けた。彼女はパウロたちに「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と強く求めた。彼らは招待を受け、彼女の家に滞在した。彼女はなぜ、フィリピに来たのか、なぜ、紫布の商人になったのか、なぜ、ユダヤ教に改宗したのか、また、夫はどのような人で、今どうなっているのか。それらは全く分からない。彼女は厳しい商売をし、日々、緊張した暮らしをしていたであろう。その彼女にとって、パウロの語る福音は素晴らしい解放であったに違いない。ヨーロッパにおいて、リディアが最初のクリスチャンとなり、そして、最初のフィリピ教会が生まれた。フィリピ教会はパウロの宣教を支援する暖かく、豊かな教会に成長していく。



「パウロに学ぶ トルコ・ギリシア旅行」に行った時、フィリピを訪ねた。大きな遺跡の町として、観光地化されていた。少し離れた所に小さな川があり、その傍に、リディアを記念する教会が建っていた。荘麗な教会ではなく、温かみのある小さな教会であった。左の写真は、同行した画家のN・Nさんが描いた「リディア教会」である。私に贈ってくださり、私の書齋に飾っている。パウロとリディアの喜びが詰まった教会である。